



志度高だより 一飛翔の窓

第101号
(H22.7.2.)

「人生これ博打」

大相撲界は野球賭博問題で大荒れ。一般大衆を納得させるだけの明確な説明もなく、また具体的浄化方策もないまま名古屋場所に突入。日本の国技を標榜してきた日本相撲協会にとって、制裁的稽古による力士死亡事件に続いて、前代未聞の不祥事となった。今回の事件、あってもおかしくないかな、と考えなくもない。というのも、年若くして相撲部屋に飛び込んだ相撲取りにとって、世間を知る機会は少ない。教を乞う親方と先輩は絶対的存在で、所属する部屋が彼らの世界観となる。いい師匠と面倒見のいい先輩力士に出会うかどうかで、人生が決まる。「ごっつあんです」一言で片づけてしまう相撲界においては、一般常識で考えれば、これはまずいぞ、と思うところも、まあいいか、となる。なにもこれは相撲界に限ったことではないが……。「よく遊び、よく学べ」こそ人間形成の理想の姿かもしれない。

考えるに、我々の人生も、まあ言うなれば博打と同じ。右にするか左にするか、上にするか下にするか、黒にするか白にするか、高い方にするか安い方にするか、毎日悩まされ、そして何らかの判断を下す。これは言葉は悪いが博打そのものではないか。半か丁かの世界。人生を左右する大きな出来事ともなれば、なおさら博打の臭いがぷんぷんする。昔を振り返って、「あのとき□□だったら、今頃俺は■■だよな。まったくもって冷や汗もんだよ」なんていうことは多々ある。



話は変わるが、私は大学時代講義に出ず毎日パチンコばかりやっていた。勝ったときの法悦感がたまらなかった。大袈裟だが、何かどでかいことを成し遂げ、自分がひとかどの人間になったような気分だった。勝ったところでやめとけばいいものを、馬鹿だから損得勘定ができない。昨日のつきがまだ残っているものと思い、颯爽とパチンコ屋へ。ところが振り返りにあつてすってんてん。悔しくて、翌日日雇いのアルバイトに行き小金を稼ぐと、またしてもパチンコ屋へ。本当に懲りない面々というのは、当時の私のような人間を言うのだ。

ところが大学2年の秋にパチンコはすっぱりやめた。もうこれ以上ないくらい徹底してパチンコをやったからだろう。というか、その時期はちょうど手動から電動への移行期で、指の芸術を楽しむ時代は終わり、コンピューターとの勝負になりつつあった。もう俺の出番はなくなった、と思ったら、急にパチンコ熱が冷めてしまった。あんなに入れ込んで、沖縄から青森までパチンコ行脚したのに。以後、賭け事はいっさいやらない。賭け事をする人間は勝ったときのことしか言わない。私なんぞはどれだけ負けたことか。毎日日雇いのアルバイトに出ていたことから、その額の大きさが分かるというものだ。親は学校に行っているものとばかり思っていたらしいが、さにあらんや息子はパチンコ狂いの駅弁大学生に成り果てていた。

人生にマニュアルはない。片道切符の旅先で何が起こるか分かったものじゃない。失禁するほどの大事件に見舞われても、さてマニュアルには何て書いてあるかな、と解答を探す。自分の人生の解答を他人任せにしてどうする。そんなことくらいなら、自分で考え、決断して失敗の方がなんぼかいい。その方が納得できるし、後味も悪くない。



人生にマニュアルはなくてもいいが、自分の生き方に対しては、今はやりのマニフェストはあってもいい。何歳までに〇〇しようとか、何十代で▲▲しようとか、粗々決めておく。いわゆる人生の青写真というやつだ。それを大きく外れなければ、今回の相撲界のような不祥事は起こらない。遊びもほどほどにやれるし、脇道にそれても、これは単なる道草だ、と余裕をもって行動できる。人間として幅も出てくる。やっぱり「よく遊び、よく学べ」か。これに勝る金言はないのかもしれない。

最後にあなたの人生はどうでしたか。半か丁。凶か吉。まあどっちでもいいか。なぜかって？ そう、所詮、人生は博打。いいも悪いもないのだ。勝ちも負けもないのだ。他人がとやかく言う筋合いではなく、我々一人ひとりが判断すべきものなのだ。たとえ失敗しても、それを何々と笑い飛ばすくらいの遊び心があれば、人生おおむね良好というところか。

おお車の前を黒猫が走ったぞ。今日はいいいことがあるかも。ウヒョー。おお今度は婆さんか。またしてもいいことが。うーん待てよ。動かないぞ。これってもしかして、救急車？ でも気にしないぞ。人生は博打だ。そうでしょう。(はっきり言うておきますが、この場合は違います)